

【医師への上手なかかり方／ここ 50 年の医学の進歩講演要旨】

平成 29 年 7 月 5 日 由利弘一郎

医師への上手なかかり方

病気（疾患）の診断・手順などについてお話をした。

主 訴（主な訴え） : 腹痛、頭痛、下痢、吐気、嘔吐発熱、関節痛などなど

現 在 : 上記のような症状が、いつ始まってどのように経過してきたのか具体的に医師に伝える。このとき、他人・知人の話など関係の無い話などはしない。

家族歴 : 家族・親兄弟・姉妹など、どのような病気で現在医師にかかっているのか又は亡くなったのか、知っている限り（高血圧・糖尿病など・・・）

既往歴 : 生まれてから現在までかかったことのある病気や怪我、外傷、交通事故など

診 察 : 聴診、打診、触診、視診など医師が行う。聴診時は話をしないで静かにしていること。

バイタルサインの観察

バイタルサインとは生命の徴候のことであり、意識、脈、呼吸、血圧、体温などのことを云う。

諸検査 : 血液・尿・便・痰などの体液、分泌物、レントゲン写真、CT, MRI エコーなどの画像検査
心電図、心音図、脈波、肺機能などの理学的検査など

これらから得られる情報を手段として診断が決まる。

診断なくして治療なし、何時の時代でも医師と患者のコミュニケーションが重要である。

ここ 50 年の医学の進歩

- 高血圧、糖尿病、高脂血症、感染症などの治療薬やワクチンなどの進歩
- レントゲン写真・CT・MRI・エコーなど画像診断技術、内視鏡などの精密機器の発達、血液生化学的検査の発達など診断技術の向上発展・発達を促した。

○未だ難渋する癌治療

現在においても苦労するのが癌の治療である。早期に発見できた場合は外科的に切除できるが、不幸にして進行癌の場合、放射線治療・化学療法（抗癌剤）による治療である。

これらは効を壮する場合もあるが、副作用が強く継続不可能のこともある。今後の進歩発展が望まれる。

○癌治療の最前線

精密医療 (PRECISION MEDICINE) 遺伝子変異別に最適な薬を投与する (内服薬)

癌細胞を採取し遺伝子解析を行う。次世代シーケンサーを使用しどの遺伝子に変異 (MUTATIONミューテーション) しているか解析する。肺癌の場合 EGFR, ALK, ROSI, MET などの遺伝子に変異していることが多いが、しかし患者により異なる。

変異した遺伝子は異常な蛋白質を作るのでそれを阻止する分子標的薬 (ゲフィチニブ) を使う。

変異遺伝子に相った治療、即ちオーダーメイド治療であり、副作用少なく確実に延命することが出来る。

この治療は現在、国立癌センター (東京) など一部の医療機関でしか行われていない。

今後、この分野の発展と人類の癌治療に光明をもたらすことを祈念してやまない。

EGFR に対する分子標的薬は既に出来ていて一部の人の治療薬となっている。

主に肺癌

K R A S
M E T
R O S I
R E L
A L K

} 分子標的薬臨床試験が行われている。